

令和 5 年 10 月 27 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12274

研究課題名(和文) 喉頭全摘術を受けるがん患者とパートナーの首尾一貫感覚を高める看護実践モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a nursing practice model that enhances a sense of coherence between cancer patients undergoing total laryngectomy and their partners

研究代表者

山内 栄子(Yamauchi, Eiko)

愛媛大学・医学系研究科・教授

研究者番号：20294803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：健康を維持・増進するという健康生成論の健康要因として規定された首尾一貫感覚を活かし、苦悩の中にある喉頭摘出者とパートナーの生き抜く内的な力を生み出し、Quality of lifeの向上を図る看護実践モデルを開発するための基礎的研究として文献検討を行った。その結果、頭頸部がん患者と家族介護者の両者が心理的苦痛を抱え、患者の身体的・社会的状態、患者と家族介護者との関係性、病識、情報量がそれらに関係していること、患者と家族介護者の心理的苦痛が相互に関連していること、患者と家族介護者は心理的支援を望み、診断早期からの患者と家族介護者を組とした介入が必要かつ有効であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

患者と家族介護者を組とした心理的介入が診断後の早期から終末期に至るまで必要であるが、介入に関する研究は始まったばかりであるという基礎的資料が得られた。本研究結果をもとに喉頭摘出者と家族介護者QOLの向上を図る看護実践モデルを構築し、がん罹患や治療による適応障害やうつ病の減少及び重症化の予防することの重要性が示された。しかし、喉頭摘出者と家族介護者の両者の困難を乗り越える力を高める看護実践モデルを開発するためには、心理的介入の方法やその有効性の実証のあり方の十分な検討が必要であるが、本研究ではそこに止らず、今後の課題としたい。

研究成果の概要(英文)：Literature review was carried out as a basic research to develop a nursing practice model that aims to improve the quality of life of laryngectomees and family caregivers who are in anguish by creating inner strength to survive. As a result, (1) both head and neck cancer patients and family caregivers have psychological distress, and whether the patient's physical and social conditions, the relationship between the patient and family caregivers, insight into the disease, and the amount of information are related to these psychological distresses. (2) the psychological distress of patients and family caregivers are interconnected; (3) patients and family caregivers desire psychological support; (4) interventions with family caregivers were shown to be necessary and effective.

研究分野：がん看護

キーワード：喉頭摘出者 喉頭摘出術 頭頸部がん 家族介護者

1. 研究開始当初の背景

頭頸部がんに対する外科的治療である喉頭全摘術では、腫瘍とともに喉頭を摘出し、咽頭を再建し、前頸部に気管断端を縫合して永久気管孔を造る。そのため、呼吸、気道防御及び発声という喉頭の機能が失われ、味覚や嗅覚の鈍麻等の様々な生活の不都合が生じ、永久気管孔やエプロンガーゼの装着による特有の外見となる。喉頭全摘術を受けた頭頸部がん患者（以下喉頭摘出者と略す）は、がんという自己存在への脅威（内海他，2011；広瀬他，2011）や再発・転移への不安（山脇他，2006；水越他，2012）等に加え、機能喪失や形態的变化に伴う苦悩等、身体的、精神的、社会的、スピリチュアル的苦痛を体験し（下鳥他，2013）、頭頸部がんの術後患者の QOL は国民標準値と比較すると有意に低い（原他，2013）。特に、摂食機能や会話機能、活動や社会的なかわり、うつ傾向といった心理機能に関する QOL が低下する（岩永他，2014）。がん患者とパートナーの心理的苦痛は相関する（Drabe 他，2015；Gustavsson 他，2012）とされることから、喉頭摘出者との会話への困難感を抱える家族介護者（名取他，2006）、特にパートナーもまた様々な心理的苦痛を抱えていると推測される。また、他者との接触を回避する（辻他，2008；長瀬他，2009；山内他，2012）、地域社会から逃避して閉じこもる（廣瀬，2007；間瀬他，2009）というように人とのつながりが希薄となる喉頭摘出者にとって家族介護者は、他者との関係性の中で生きるという人間根幹の欲求を満たし、他者との関係性の中で病気体験を意味づけて自分の存在価値を確認する上で重要な存在となる。そのため、身体的、心理的、社会的、スピリチュアル的苦痛を抱え、QOL が低下している喉頭摘出者と家族介護者に対して緩和ケアが求められる。しかし、喉頭摘出者と家族介護者が頭頸部がんと診断された早期から緩和ケアを受けられる体制は整備されていない。本研究では、健康を維持・増進するという健康生成論の健康要因として規定された首尾一貫感覚（Sense of Coherence；以下 SOC と略す）（Antonovsky，1987）を活かし、がん罹患、喉頭全摘術を含むがん治療、喉頭発声機能の喪失等の苦悩の中にある喉頭摘出者とパートナーの生き抜く内的な力を生み出し、診断後早期からの心理的苦痛に対して緩和ケアを実現し、Quality of life（以下 QOL と略す）の向上を図る看護実践モデルを開発するため、基礎的研究として文献検討を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文献検討により頭頸部がん患者と家族介護者への心理的苦痛に対する介入に関する国内外の研究の動向を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

(1) 文献の抽出では、データベースは、Medline、CINAHL、医学中央雑誌を用いた。

(2) 検索は、「head and neck cancer」「patient」「family」「caregiver」「dyad」「intervention」「program」「sense of coherence」「頭頸部がん」「患者」「家族」「介護者」「介入」「首尾一貫感覚」の用語を組み合わせで行った。検索期間は 2018 年までとした。

(3) 文献の選択基準は、①頭頸部がん患者および家族介護者を対象とした研究である、②看護師による支援である、③心理的苦痛に対する支援である、④支援内容と成果が示されている、⑤がん治療の方法や時期の如何は問わない、とした。

(4) 選択基準に従った文献の選定は、主研究者が一人で初期検索を行い、主研究者を含む研究者 2 名が抽出された文献の表題と要旨を独立して評価した後、研究者間で討議して最終的に採択する文献を決定した。そのほか、重複論文、結果が十分に読みとれない論文、看護師による介入であることが明確でない論文は除外した。

(5) 抽出した文献の所見を整理するために、著者名、発表年、調査された国、目的、研究デザイン、時期や治療方法、対象、介入の必要性、介入内容・介入成果の概要を含むレビューシートを作成した。

(6) 文献は研究者 2 名が独立して論文を精読し、選択文献の妥性を検討した。

4. 研究成果

(1) データベース検索により 150 件が抽出され、選択基準に沿って 135 件を除外し、15 件を分析対象とした。

(2) 発表年は、1990 年代発表の 1 件を除き、2010 年以降で、2015 年以降、年に数件ずつ発表されていた。調査された国は、全件、海外で、日本はなかった。研究デザインは量的研究が最も多く 11 件で、その内訳は関係探索研究が 10 件、実態調査研究 1 件であった。その他は質的研究が 2 件、系統的レビューが 1 件であった、介入研究は 1 件のみで、無作為化比較試験であった。対象は、12 件が患者と家族介護者を組みとして調査した研究で、残り 3 件は組ではない患者と家族介護者を対象とした研究であった。時期は診断後早期、治療期、終末期など様々であった。治療方法は放射線療法や手術療法であったが、喉頭摘出術はなく、治療法が明記されていない論文もあった。

(3) 患者および家族介護者の SOC およびそれを高める介入に関する研究はなかった。

(4) ①介護者はそのほとんどが配偶者またはパートナー、女性である (Paek 他, 2018)、②患者と家族介護者の両者が心理的苦痛や QOL の低下を抱えている (Hodges 他, 2009 ; Badr 他, 2016 ; Sterba 他, 2016 ; Maguire 他, 2017 ; Sterba 他, 2017)、③患者と家族介護者の心理的苦痛が相互に関連している (Hodges 他, 2009 ; Rhondali 他, 2013)、④患者の身体的・社会的状態、患者と家族介護者との関係性、病識、情報量が家族介護者の心理的苦痛や QOL と関連している (Manne, 2010 ; Badr 他, 2014 ; Richardson 他, 2015 ; Johansen 他, 2018 ; Paek 他, 2018)、⑥患者と家族介護者は心理的支援を望んでいる (Richardson 他, 2015)、⑦患者だけでなく家族介護者に対する心理的介入が必要である (Badr 他, 2014 ; Richardson 他, 2015 ; Badr 他, 2016 ; Sterba 他, 2016 ; Maguire 他, 2017 ; Paek 他, 2018 ;)、⑧診断早期からの介入が必要である (Hodges 他, 2009 ; Sterba 他, 2017 ; Johansen 他, 2018)、⑨患者と家族介護者を組とした介入が必要かつ有効である (Foxwell 他, 2011 ; Parker 他, 2016) が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒田 寿美恵 (Kuroda Sumie) (20326440)	県立広島大学・保健福祉学部(三原キャンパス)・教授 (25406)	
研究分担者	松井 美由紀 (Matsui Miyuki) (30511191)	愛媛県立医療技術大学・保健科学部・教授 (26301)	
研究分担者	鈴木 久美 (Suzuki Kumi) (60226503)	大阪医科薬科大学・看護学部・教授 (34401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関